

Die Eiche

ディ アイヘ

<http://www.jdg-chiba.com>

Japanisch-Deutsche
Gesellschaft der Präfektur
Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdgc-chiba.com



協会Home Page

新春講演会開催

-和やかに開催される-

新春講演会が1月30日（日）15時30分から「千葉県日独協会の25年を振り返って」と題して、金谷誠一郎会長が講師となり開催されました。新春講演会は協会恒例のイベントとなっていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により昨年は中止を余儀なくされたので、2年ぶりの開催となりました。当初は、対面およびオンラインミーティングツール「Zoom」を使用する「ハイブリッド形式」での実施を予定していました。しかし年明けより始まったオミクロン株の急速な感染拡大に伴い、対面のほうは見送ることになりました。

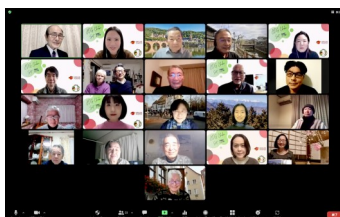
このような経緯でオンラインのみによる開催となりましたが、当日は会員ら約30名の参加者がPC上で集合し、金谷会長の講演を拝聴しました。講演会は大きく2つのパートに分かれて行われました。前半の20分間はパワーポイントを使って、会長ご自身で用意された写真をもとに過去を回顧するお話し、後半の25分間は会長へのインタビューを通して千葉県日独協会の25年と、将来へ向けて会長のお考えを伺うという対談形式で進められました。



和やかな雰囲気で行われた新春講演会

前半では、最初に10日ほど前に亡くなられた当協会生みの親の一人である林顧問への追悼から始まり、協会の大きな活動の柱である「ドイツ軍人慰霊祭」の記念すべき第一回目の様子、加藤吉昭・初代会長の追憶、また協会活動として特に思い出深かった千葉大学との共催による「ドイツに親しむ3日間」（2005年）などの行事を中心としたお話しがありました。お聞きになられた会員の皆様の中には当時の懐かしい思い出が蘇った方々もおられたのではないのでしょうか。

後半では、当協会の活動に見られる特色、とくに若手会員の活躍と今後への期待、機関誌である『Die Eiche』発刊時の原稿集めや、いろいろなイベント企画でのご苦労話、25周年を迎えての感想と、次の30周年に向けての展望など、普段はなかなかお聞きする機会がなかったお話をインタビューによって会長から親しく伺うことができました。



講演会後の集合写真

講演会のあとは30分間ほど、小野様、桑原様をはじめとする方々からのご感想・コメントにとどまらず、オンラインの特性を生かし、遠方の参加者からのスピーチなども加わり盛り上がりしました。ドイツ留学中の大野理事のライブ中からのドイツの最新事情を伝えるご報告、ゲストとして参加された群馬日独協会の高橋様からのメッセージもいただきました。ドイツ政府から功労賞を受賞されておられる伊藤様からは、ご父君様が翻訳された

「ボーボー頭のペーター」のエピソードなど興味深いお話も伺うことができました。またこの間、新会員になられた植松アネッテ様、本名様からご挨拶も頂戴しました。最後は竹内理事の誘導によりスナップショットの撮影も行われました。

協会設立25周年を迎えた大きな節目の年に、発足当初から終始協会の発展にご尽力されてこられた金谷会長から、これまで知らなかったエピソードも含めた貴重なお話を伺うことができ、たいへん充実した新春講演会となりました。

なお会長講演に先立ち、杉田副会長・事務局長、勝見青壮年部長からこの2年間の活動状況について報告がありました。また対談の際のインタビューアーは本間常任理事と筆者（田中）が、全体の司会は木戸副会長が務めました。

（理事：田中 瑛）

追悼

2月26日の朝、本橋常任理事から、「昨日父が亡くなりました」とのメールをいただきびっくりしました。いつもテニスで体を鍛えておられた橋口氏は遅かれ早かれ退院して、にこやかな顔で退院されるものと信じていたからです。当協会でもドイツ駐在歴が合計で23年に及ぶ会員は、後にも先にも橋口氏のみであり、2002年秋に帰国後、間もなく入会されました。



入会時にいただいた履歴書によると、初めは、三井物産の駐在員として、ドイツでは東ベルリンやデュッセルドルフで主に機械部門を担当されて活躍、1993年から2002年まではデュッセルドルフ日本クラブの事務総長として500社の法人会員と7,000人の個人会員の世話をするという大変重要な職務を担当されました。時にはデュッセルドルフ市との交渉などにも出かけて難しい問題を解決するなど、色々ご苦労があったものと思いますが、いつもあのにこやかな笑顔を忘れず難問を解決されていたものと思います。

私個人として橋口さんとの思い出は、①2002年秋に当協会に入会されて間もなくの10月20日（日）に行われた滞日ドイツ人とのバスハイクで偶々橋口氏の隣に座った方が慰霊祭にも参加される石崎氏で千葉高校の同級生であり、「金谷さん、50年ぶりに石崎さんに会えてびっくりしました。」とニコニコしながら言われて驚きました。②その後、2005年の「ドイツに親しむ3日間」では、平尾会長の下で橋口さんが実行委員長として、大活躍されたわけですが、国枝副会長、坂本氏、小野氏、鈴木氏（故人）、加藤歯科の加藤先生等と共に、千葉大学のけやき会館でイベントを開催することになり、私には橋口氏から「このイベントに相応しいキャッチフレーズを考えて欲しい」との指示があり、「ドイツに学ぶ3日間」「ドイツを旅する3日間」など10個近くを提案した結果、「ドイツに親しむ3日間」が橋口実行委員長に採用されました。ともかく橋口氏の笑顔で色々指示されると、嫌とは言えない魅力のある人でした。先日、元某県日独協会の元の会長でドイツでは同業界の商社会で橋口氏と交流があった人から電話があり、「橋口さんは元気？」との問いがあり、「残念ながら先月亡くなりました。」と言う「エーッ？」とびっくりしてとても残念そうでした。・・・心からご冥福をお祈り致します。



千葉県日独協会 会長 金谷 誠一郎

橋口名誉会員を偲んで

-Düsseldorfにおける日本デー-

2018ドイツ旅行勉強会資料として2018/4/7に橋口名誉会員が旅行者向けに「デュッセルドルフにおける日本デー Japan Tag in Düsseldorf」というタイトルで説明された内容を故人を偲び掲載します。

●以下、説明内容（原文のまま転記）

デュッセルドルフ市は嘗てのルール炭田をベースとしたルール重工業地帯の中心地で、現在はドイツ最大の州、ノルトライン・ウェストファーレン州の州都である。戦後日本の経済復興は石炭・鉄鋼業から始まり(傾斜生産方式)、その手本が敗戦からいち早く立ち上がったルール重工業であった。1950年代からデュッセルドルフへの日本企業と日本人の進出が始まり、1992年、日本のバブルが弾ける直前にはその数500社、9000人に達し、リトル東京・アム・ラインとも呼ばれるようになった。

その過程で1970年代に入るとオーディオ、電子機器等を中心に日本製品が怒涛のごとく押し寄せ、ドイツ企業を圧迫、日本に対する空気が陰湿なものとなったことがある。デュッセルドルフではその市民と日本人社会の相互理解と友好の深化が図られ、1975年には日本人社会から市に日本庭園が寄贈され、1983年には1回目の日本週間が開催された。夜の花火には100万人の人出があり、交通機関が混乱、市民の多くの帰宅が翌日になるという問題も残したが、市側は大いに気を良くした。そして第2回目の日本週間は10年後の1993年の秋に州の日本年の行事に組み込まれて開催された。天皇皇后両陛下のご訪問をハイライトに猿之助の歌舞伎、浜松の大凧上げ、町屋の神輿、3000人の盆踊り等々125の行事が行われた。9月11日が日本週間の中心となる市民祭で、ブルク広場のオープンステージやライン川プロムナードに展開するテント、或は芝生のラインパークで、日本クラブの同好会、日本人学校生徒、日本人幼稚園園児等、日本人市民による日本文化紹介のイベントが生まれ、並行してアルトシュタット（旧市街）を神輿が練り歩き、日暮れを待ってラインの花火となった。ラインの花火は1時間弱、2万発が打ち上げられ、近郷近在120万の観衆を酔わせた。

この日本週間行事には日本クラブ会員企業200社、800人の駐在員及び日本クラブ所属同好会多数のボランティアが参加、分担、協力し、実行されたことが特筆される。(現地で定年を迎えようとしていた筆者は日本クラブ特任として事務局を務め、総領事館とも協力してデュッセルドルフ市と日夜協議することになったーデュッセルドルフ日本週間物語)

第3回は日独政府間ベースの「ドイツにおける日本年2000」のフィナーレとして10年を待たず前倒しに2000年9月に開催された。この日本年は1999年12月にベルリンで秋篠宮ご夫妻を迎えオープニング、

続いてドイツ各地で文楽、能他、いろいろな日本文化が紹介され、2000年9月デュッセルドルフでフィナーレとなる。このフィナーレは93年の日本週間の再現、即ち市民祭として神輿盆踊り、そして花火であった。

因みに2005/06年の「日本におけるドイツ年」（当会「ドイツに親しむ三日間」）は2000年日本年行事「ドイツにおける日本年」のお返しである。

日本年行事が終わり、その大成功から市側は次回開催が10年後と云うのは間の空きすぎだとし、5年案などが出されたが、資金も問題となった。因みに93年は日本人社会・市・州の予算と日独企業の寄付が資金となった。日本年フィナーレは市、州、日本人社会が3分の1ずつ分担したが、州、市は緊縮財政上、期間の短縮案として**日本週間に代わり日本デー**とし、とにかく2001年は2000年の余韻を保持するため続けて開催することとなった。その後は日本側の資金に余裕が若干あることに鑑み、2006年までは「日本デー」を継続開催することに決定した。現実には今年まで継続している。一番カネがかかるのが花火で、この部分は主としてドイツ企業の寄付ときく。

また1988年にはデュッセルドルフ市700年祭にちなみ彼我共同で日本-デュッセルドルフ奨学基金を設立し、毎年の研修生の日本派遣となっている。（おわり）

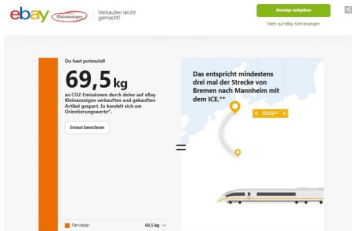


最新ドイツ事情

青壮年部 保坂 有里奈

昨年の7月から約半年間、ボンに留学しておりました。今回の滞在では、特にドイツ社会の環境問題に対する意識が印象に残っております。

ドイツに越えてきて自転車の購入を検討していたところ、友人は口を揃えて「一度、eBay Kleinanzeigenを見てみなよ」と言いました。「eBay Kleinanzeigen」とは、個人間でものを売り買いできるプラットフォームです。日本にも似たようなサービスは存在しますが、個人的にはとりわけ利用率が高い印象を受けました。同サイトの活用理由には、少なからず「節約」という観点があると思います。一方で、その背景には「廃棄物の削減、資源の節約、CO2等の排出削減」というドイツ社会の環境に対する意識が垣間見えました。実際に、同サイト内では自身の取引を通じて、どの程度のCO2排出の削減に繋がるのかを可視化できます。（写真参照：自転車一台を売った場合）



取引によるCO2削減の期待効果を示される

更に、ある道路の一角には「Platz zum Verschenken」という不要になった物を置けるスペースが設けられていました。食器類、衣類、古本等、あらゆる物が大体二日に一度のペースで入れ替わっていました。中には、使い古した靴が置かれていたこともあり、私は目を丸くしながら思わず立ち止まってしまいました。それでも次の日には、すっかり物が入れ替わっていました。



不要物を置けるスペース

今回のドイツ滞在を通して、「なるべく新しいものを買わない」、「不要なものではできるだけ引き取り手を探す」といった考えを改めて吸収しました。

土屋さんのコンサートを聴いて

会長 金谷誠一郎

室内楽のコンサートのご案内があり、しかも土屋さんも出演するとのこと。コロナ問題が発生して以来、演奏会には全く無沙汰だったこともあり、2月19日（土）には、早目に昼食を済ませて会場のすみだトリフォニーホールの小ホール（JR総武線、錦糸町駅から徒歩5分）へ向かいました。演奏会場は他の演奏会場と比べても遜色ない印象を受けました。



ホルン三重奏曲を演奏中の土屋さん
(写真中央)

曲目は、以下の内容でした。

1. Mozart: 弦楽四重奏曲第14番ト長調「春」JK387
2. Brahms: ホルン三重奏曲変ホ長調Op.40
3. Brahms: ピアノ五重奏曲へ短調Op.34

土屋さんは、ホルン三重奏曲のピアノパートで、また、アンコールのバッハ「主よ、人の望みの喜びよ」でもピアノパートを演奏。プログラムの解説によると、ホルン三重奏曲はブラームスが32歳の時の作品で、ホルンが入るのはこの曲のみとのこと。ホルンの持っている森と狩のイメージを十分に生かしたいとのブラームスの思いが感じられ、ホルンとバイオリンとピアノがお互いの息使いを感じながらの見事な演奏に感銘を受けました。演奏者は、いずれも楽器演奏を趣味とする方々で不定期で演奏会を開催するとのことでした。次回の演奏会が楽しみです。

ドイツ文学と音楽に魅了されて



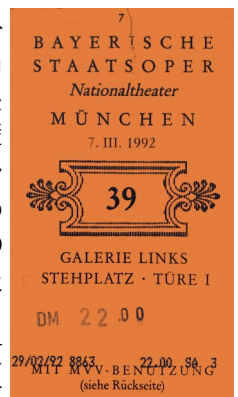
ドイツと私 - 松浦 -

私とドイツの繋がりの発端は、文学と音楽とに集約されます。運動音痴で小中高とずっとインドア派だった私は、勉強そっちのけで読書に勤しみ、世界文学全集などを読み漁るうちに、その中でもドイツ系の作家に惹かれ、大学では文学部に入学し、トーマス・マンを研究対象として選びました。トーマス・マンが実際に生活していた風景をこの目で見ようと、大学の春休みにひと月あまりのドイツ旅行に出かけた時の記憶が、今も鮮明に脳裏に焼き付いています。マンの生地であるリュベック（『ブuddenbrook』、『トニオ・クレゲル』の舞台）から旅行をスタートしたのですが、北ドイツの寒く重苦しい雰囲気は馴染めず、いちばん居心地が良かったのはハイデルベルクでした。リュベックが氷点下の寒さだったのに対し、ハイデルベルクは天候に恵まれてぽかぽかと暖かく、有名な哲学の小径やハイデルベルク城の散策は本当に気持ちの良いものでした。



学生時代のドイツ旅行・ハイデルベルク

このドイツ旅行では、本場のクラシック音楽に直接触れられることも楽しみでした。旅の後半で訪れたミュンヘンでは、現地で合流した音楽通の大学の先輩（彼は今、ベルリンで音楽評論家として活躍しています）のコーディネートで、バイエルンの国立歌劇場に行きました。当時の私はマーラーやブルックナーなどの重厚長大なドイツ音楽に傾倒していたのですが、先輩が連れて行ってくれた公演はドニゼッティの「ランメルモールのルチア」。期待していたものとは違っていたのですが、その時タイトルロールを歌ったのはエディタ・グルベローヴァ。つい先日亡くなった名ソプラノです。当時まさに全盛期の歌声で、めくるめく陶酔の初オペラ体験となりました。貧乏学生でしたので22マルクの立ち見席でしたが、あとから考えればどれほどの幸運だったかと思えます。



バイエルン国立歌劇場のチケット

あれから早くも30年余、他の国を訪れる機会はあるけれども、なぜかドイツ再訪とは縁がなく、普段の仕事でもドイツ語に触れることもなく過ごしてきました。ところが昨夏、東京オリンピック・パラリンピックで世界中から集った100名弱の通訳者を統括する仕事に携わることができました。ドイツ語通訳者も7名いて、彼らは私が少しドイツ語を解するのが分かったと、途端に親しく接してくれて、束の間学生時代に戻った気がしました。コロナ収束後か、はたまたいつになるかは分かりませんが、ドイツ再訪を夢見て過ごす今日このごろです。



オリンピック・パラリンピックでの通訳者の統括

新入会員紹介

竹内 莉理

皆様初めまして。

1月より入会させて頂きました竹内莉理と申します。

現在私は音楽大学大学院に在籍し、ドイツ音楽を中心に勉強しております。私がドイツ音楽に惹かれるようになったのは、中学生の時にブラームスの作品を勉強したことがきっかけです。そこからシューベルトやシューマンの作品も勉強するようになり、ドイツへの想いが更に強くなっていきました。写真のハンブルク市庁舎は2年前にハンブルクへ音楽講習会を受けに行った時に撮ったものです。



J. Brahms: 4つの小品 Op.119を演奏中の筆者



ハンブルクの市庁舎

ドイツ語やドイツの文化への理解を深めたいと思っておりまして、千葉県日独協会の活動を知り、入会致しました。

千葉日独協会で皆様とご一緒に活動できることをとても嬉しく存じております。どうぞよろしくお願いいたします。

書籍/Buch

ジェニー・エルペンバック著、浅井晶子訳『行く、行った、行ってしまった』白水社、2021年、3,630円（税込み）

作品の舞台となっているのは、ドイツに100万人を超える難民が押し寄せた2015年頃のベルリン。主人公は、すでに現役を引退した元大学教授のリハルト。彼は旧東ドイツの出身。難民と出会い、交流するうちに、難民問題に関心を抱く。ドイツ語の授業の教師役も引き受け、難民の存在は、次第に彼の日常生活の一部となっていく。同時にそれは、自分がかつて育った旧東ドイツ時代の思い出へとつながっていく。アフリカからドイツへと流れ着いた難民たちと、1990年に「突然、一晩のうちに、別の国の市民になった」東ドイツ市民の記憶が重なり合っていく。その様を、繊細に淡々と描き出していく。そのなかで「どこへ行けばいいかわからないとき、人はどこへ行くのだろう?」と読者に問いを投げかけている。東ドイツ時代の記憶と現代の難民との交錯を描き出した話題の小説である。



著者のジェニー・エルペンバック（Jenny Erpenbeck）は、1967年に東ベルリンで生まれ、フンボルト大学で演劇学を学ぶ。東西ドイツの統一後に作家としてデビュー。現代ドイツを代表する作家のひとりである。本書は2015年に発表されベストセラーとなり、トーマス・マン賞を受賞。これまでに30言語に翻訳されているという。タイトルの原語は「Gehen, ging, gegangen」。

訳者の浅井晶子氏はベルリン在住の翻訳家。さまざまなドイツ文学作品の翻訳を手掛けている。訳文は、難解な表現を避け、平易で読みやすいリズム感のある文体となっている。なお本書は、2021年度日本翻訳家協会「特別賞」を受賞している。

（理事：木戸芳子）

訃報

橋口 昭八名誉会員

2月25日、ご逝去されました。享年89歳。葬儀は、3月5日ご家族のみにて執り行われました。本号、P1に金谷会長より追悼文が寄稿されています。



太田 明廣会員

2月1日、ご逝去されました。享年89歳。橋口名誉会員と高校時代の同級、München大学留学、東日本フンボルト協会理事等を歴任されました。

協会事務所の所在場所が変更となります。

4月1日より、千葉県日独協会の所在地が、以下となります。

〒270-2214千葉県松戸市松飛台556-12

Tel./Fax: 047-385-1456

今後の予定

【総会】 4月書面形式での審議（4月9日送付）

【催しもの】 オンライン食文化講演会

「オーストリアからマルツァイト」

テーマ： 春を呼ぶホワイトアスパラガス

2022年4月23日（土）

* 詳細は、別途、ご案内致します。

会員情報

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、
（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事

編集後記

私が入会した折、やさしい笑顔で橋口名誉会員は、運営委員会に迎え入れてくださいました。私は、DDRに学生時代より関心を持っていたと話すと、目を輝かせて駐在時代のお話をしてくださいました。ご冥福をお祈りします。協会の活動は、新年度に入り、依然、コロナを意識した活動の展開を余儀なくされていますが、会員の皆様がお持ちの専門分野の知見を共有できるような場が協会内にできないか青壮年部にて検討スタートしています。ドイツに関する歴史、文学・言語、日本文化等々、このDie Eicheでも今後、適宜その内容を発信したいと思っています。テーマに関心をお持ちの方は、お気軽にご参加ください。（勝見 浩明）